

ヒュプノスの眠り

「一緒に眠りましょう。その時が来るまで…」



体験版



サークル『飛ぶ黒猫』

渡瀬 由

体験版・目次

蒼き自浄作用・・・・・・・・・・・・・・・・三

束縛の法・・・・・・・・・・・・・・・・五

凍える記憶・・・・・・・・・・・・・・・・七

体験版・あとがき……らしきもの……………一〇

蒼き自浄作用

その日、地球に住む全人類が絶望した。

原因不明の伝染病。それは瞬く間に海を、大陸を超え、地球上すべてに伝染した。研究も追いつかず、特效薬も予防法も見つからないまま、人々は自らの死を待つだけになっていた。

必死の思いで掲げられた一大プロジェクトによって、人類の滅亡はかろうじて免れ、人種、国籍を超えて人々は地下へと脱出、たゆまぬ研究と開発によって都市を建造し、徐々にではあるが生活を取り戻していった。

そして、百二十年。研究者と助手は今や忘れ去られた地上への道を開き、伝染病の終息や原因究明を目的に地下から姿を見せる。

「病原菌、細菌類の採取を完了。モニタリングの結果も今のところは問題ないようです」

「今のところは、か。よし、地上に出る。ゲートは忘れずにロックしろ」

私の後ろでひどく重い音が響いた。生きて故郷へと戻ることができるとかという不安が脳裏をよぎる。だが、今まで何人も優秀な研究者・施設・技術を使っても未だに解明できない伝染病。一回のみの調査だが、ようやく許可が下りたんだ。何とか手掛かりを掴みたい。

それにしても、この光景は私の足を鈍らせる。長期間とはいえ僅か百数十年。このような環境になっているとは。

「博士。私の知る限り、このような事は…」

「分かっている」

特殊ゲートから半ば放り出される形で地上に出た私たちが、ゲート付近を除いて見渡す限りの緑。それも、無数の木々と草花、どこからか聞こえてくるせせらぎの音。私の真上でチツチツと鳴く鳥の声。そのすべてがあまりにも新鮮で、調和が取れ、何もかもが作られた庭園のように見える。前にチェックした映像ではこの様にはなっていないかったはず。妙な感覚だ。

「あの影は何だ？」

助手の後ろで茶色の影が走っていく。

「映像はちゃんと撮れているんだろ？」

「もちろんです」

影の正体は分からないが、動物であることは間違いないだろう。あの伝染病は動物には感染しない。当時のデータに間違いはないようだ。それに、ウイルスの変異もこの長い期間を経ても変わりはないように思える。

「もう少し進んでみよう。まだ時間はある」

「しかし、万が一の事があれば」

境界線から一キロメートルでは判るものも判らない。特殊な薬でどの様な環境にも耐えられる処置をしているが、効果は三時間。それまでに帰還しなければ

ばならないが、研究者としての血が騒いでいる。何とかもう少し踏み込みたい。

「この先だけだ。後は戻る。それにもしもの時はデータだけは必ず送れ」

助手も仕方ないという表情だ。

「わかりました、博士」

不思議な光景が続いていく。ここにはかつて都市が存在し、何十万という人々が生活していた。いまやその面影はなく、廃墟と化した建造物が僅かにその痕跡をおわせる。

「博士！ ちよ、ちよっと！」

声のする方へ私は急ぐ。縦横無尽に伸びた木々の根に足を取られながら助手の恐怖に怯える顔を見た。

これは人間の、手？

一瞬、頭の中で整理ができず、何度も同じ言葉を繰り返す。だが、それは紛れもなく人間の手に間違いない。それにこの質感は樹木そのものではないか。長い年月を経て木と一体化したのか、いや、腐敗もせずにこのまま残る事などあり得ない。

そう思うと、周りに立つ木々に目を奪われる。手だけじゃない… 人間そのものが木へと変化している！？

ぞく、と背中に寒気が走る。ここにはいけない。直感が私にそう教えている。これは悪夢か？ それとも。

「嫌な予感がする。今すぐここを離れた方がいい」

返事はない。

「どうした、どこにいる！」

彼の姿がどこにも見えない。何か、何か遺したい。おそらく私に残された時間はない。

風が吹いた。気がついた時、身体感覚が急に失われていくことに気付く。消えそうなほど小さくなった意識の中で、人類の行ってきた歴史が走馬燈のように脳裏に映し出される。人類は科学技術の発展と自らの国の繁栄のため、緑を壊し、緑を売りさばき、残るのは荒廃した大地と砂。人類の保護を理由にして地下へと逃げた私たち。あの原因不明のウイルスは本当に偶然の産物だったのだろうか？ それとも…。

風に乗れ、一枚のメモが飛んでいく。その方向には、地下都市に続く特殊ゲートがある。荒廃した大地と緑の境界にそのメモは落ちた。

『これは地球の、意思に違いない』

人間の贖罪は、終わるのだろうか。

束縛の法

地球を『人類』のものだと誰かが言った。それはある意味で正しく、また大きく間違っていた。数多の生物と共生し、あらゆるものを造りだし、繁栄を極めてきた私たち人類は、いつの間にか“失っていく”怖さを忘れていた。

絶滅種の増加や地球温暖化の悪化。協議を重ねても形だけで終わり、結局は自らの首を絞める結果となっていく。そして、地球という母なる星は惑星のとして寿命ではなく、人類によって引き起こされた環境の崩壊という形でその命を終えようとしている。

そこに、異星人の襲来事件が起きた。あまりに突然で、速く。

抵抗という言葉が出ないくらいに人類は異星からの訪問者の手によって支配下に置かれたのである。

「これが、今から十年前に起きた地球事変と呼ばれる事件だ。彼らは、私たちを殺すこともなく、隷属させることもなかった。世界各国の政府も経済も維持された訳だが、彼らは私たちに一定の制限を設けた。彼らは私たちを監視下に置き、あらゆる技術開発を停止させた」

目の前の生徒の表情は、まだ『彼ら』がなぜ私たち人類をこの地球に残したのか、ただ監視するという奇妙な方針を取ったのか、恐らくまだ理解できていないのだろう。いや、大人でさえも本当に理解できているのか。

「先生！なぜ、私たちは普通に生活できているのですか？ 支配するのなら、なぜ、私たちは闘わないのですか？」

生徒の一人が大きく声を上げた。

「あらゆる技術開発を禁じられ、テクノロジー全体で遙かに劣る人類は、残念だが彼らに対抗する手段を持たないんだ。それに、彼らは、人類が宇宙に出ることを禁止したことは前に教えたね？ これは人類が地球から逃げてしまわないようにするためなんだ」

「どうしてなのですか？」

そう。彼らは侵略者ではない。言ってみれば、宇宙全体の監視と管理執行が仕事。彼らから見た地球と人類。その結果が…。

「この地球は長くてあと数十年しか保たない。私たち人類は今まで行ってきた事の償いのため、地球から出ることができないんだよ」

人類が地球に対して行ってきたもの。森林の大規模伐採、資源の枯渇、生態系の破壊。これは人が生き、発展していく上での副産物だったのかもしれない。だが目先の利益だけに囚われて具体的な策も打たないままだった。これは宇宙に対して、なにより地球に対して大きな罪として問われた。一部の人間たちにはなく、この地球に住むすべての人間にも罪があると。

「監視者は私たちに最後までこの地球とともに生き、滅びることを望んだ。それ

が判決だったんだよ」

これから先、人類がどうなっていくのか。それは誰にも分からない。ただ何もせず、絶望のまま生きていくだけなのか、それとも……。

最初から最後まで、私たちはこの地球という星から離れることはないのだろうか。この星で生まれた者の義務であるように。

しかし私は思う。悲観するにはまだ早い。きっとやれることが残っているはずだ。地球と人間と、そして、あらゆる生物が共に歩める方法が。そのための時間は、まだある。

凍る記憶

今日の私は一段と気持ち暗い。

空は綺麗に晴れ渡っている。世界中がクリスマス一色に染まり、昼間という時間でもカプルたちが手を繋ぎ寄り添い、仲睦まじい様子を見せつけている。いつもなら微笑ましくさえ思うその光景でさえ嫌になっってくる。

「はあ。なんだか憂鬱よね」

昨日の深夜、突然に掛かってきた一本の電話。それは愛する彼氏からだった。もう五年も付き合っていて、そろそろ結婚という二文字が頭の中に浮かび、心に決めようとしていたそんな時に切り出された突然の別れ話。

理由は、やはり好きな女性が出来たということ、そこで初めて私は二股を掛けられていたことを知った。彼が言うには私は固すぎて面白みに欠ける飾り気の無い女なのだそうだ。

久しぶりに、デートの為に取った休日も無駄になってしまい、私はただ街の中を彷徨っていた。普段は寄らない駅で電車を降り、小さな迷路のような路地を歩いていく。こうしているだけでどこか気分が楽になるような気がしたからだ。夕暮れが近づき、周りでは音楽が溢れ、きらびやかなイルミネーションが街を包んでいくのだろう。でも、私の心はただ道に迷うばかり。

「そこのお嬢さん、元気がないみたいだね。うちの商品でも見ていかないかね」
「えっ：私、ですか？」

何気なく声を掛けられ、振り向いた先には、いかにも下町の雰囲気を残した古びた一軒家の雑貨店だった。

声の導くまま気晴らしにと店内に入った私はその商品の多さに驚く。食料品から、衣類、雑貨、家電類など、埃をかぶりながらも綺麗に陳列されている。外見からはかなり狭いと思っていたけれど、中は予想以上に広く整理されていた。

「へえ、色んなものが置いてあるのね」

「ははっ、そうですな。もし、失恋したのならこれなんかいかがですか？」

私の事を一言も聞かずに、失恋したなんてどうして判ったのだろう。私の表情にはそういうものが読みとれるほどに参った顔をしているのだろうか。

そういつて白いヒゲを顎にたくわえている初老の男性、腰は曲がっては無く、堂々とした振る舞いが特徴だった。彼は少し重たそうに持ってきたのは一台の小さな冷蔵庫だった。大きさは三十センチ四方といった感じで、冷蔵庫としては実用性がない大きさ。

「お嬢さん、これは冷蔵庫ではありません。ちょっと珍しい品でして、これは『冷凍庫』なんですよ」

実際に近くにあるコンセントにケーブルを差し込むと、少しウイン、ウインというファンの回る音を小さく立てながら動き出す。扉を開け、手をかざしてみると確かに冷凍庫とは温度が明らかに違う。そしてこの店主の説明を聞いたとき、

私は目をキョトンとさせた。

「これはただの冷凍庫ではありません。『記憶』を凍らせることができるんですよ」

「記憶を、ですか？」

「そうです。忘れない、消してしまいたいものをこの中に入れるんです。例えば、彼氏との思い出の品とかですな」

その言葉に私は背筋がぞくぞくするほどの奇妙な感じを覚えた。当然、そんな事があるわけがない。しかし、自分でも意識できないほどに今回のことはショックだった。あれほど一緒にいようと云ったのに。だから、今は少しでも彼の事を忘れてしまいたい、その気持ちが勝っていた。

冬の寒い風が突然に私を吹きぬけた。まるで私の目を覚ますように。

「あれ？ 私、何をしていたの？」

何事もなかったように流れていく時間。手には大きな手さげ袋。でも、振り返った先に家は建っていないかった。

さっきのことは夢？ それとも私がおかしくなってしまったのだろうか。それでも手に握られている袋からはずしりとした重さを感じられる。

「私、馬鹿みたい」

冷凍庫か。きつと疲れているところに付け込まれたに違いないけど、それは仕方がない。それに実際に効果があるかどうかというのは問題じゃない。ほんの少しでも気持ちが楽になればと思っただけだった。

ガチャン

都内にあるマンションの一室。

玄関のドアが閉まる音を確認してから私は抱え込んでいた手さげ袋を床に下ろす。さつそく箱を開け、冷凍庫を取りだし、近くにあるコンセントに差し込む。冷えてくるのを確かめてから、寝室にある彼の写真と、別れの電話があつてから指から外した指輪も一緒に入れた。

「特に変化はないわね。それはそうかも」

特に彼への『記憶』に変化はない。もちろん、あの店主が話したことを鵜呑みにしたわけでもない。ただ、ちょっとした期待もあった。

ただ単に悪質な店に引つかかっただけかもしれないが、こんな日もある。私はスーツを着たままベッドになだれ込むと、自分でも気付かないうちに睡魔に身を任せていった。

「この世はホントに嫌なことが多いねえ。それでこそ私の商売が成り立つ訳だけどね。まあ、欲しいものはちゃんと頂くよ。それが代金だからね」

クリスマスの夜、静かな光を湛える月に向かい一人の男がつぶやいた。

カーテンを閉じないまま、開けっ放しになっていた窓から陽光が射し込んでくる。けたたましい目覚ましの音が寝室中に鳴り響き、共鳴するように外からは楽器を思わせる小鳥たちの声と、小さな子供達が外に遊びに出て走り回る声が耳に入ってくる。

「う、うん」

乱れた髪を近くにあった櫛ですき、チェストに置いてあるピンでとめながら、リビングへと向かう。

郵便受けから新聞を取りだし、お湯を沸かすと、インスタントのコーヒーをカップに注ぎ込む。何気に眺めたテレビのニュースで気なった事件を見つけた。ちやうどここから数駅いったところにある公園での事件だ。

『昨夜、銀行勤務の男性社員、横溝 よこみぞ 武さん たけしが公園内のベンチで凍死しているのが発見されました。警察の見解では事件性はなく…』

「ふくん、クリスマスの日に公園で何をやってたのかしらね。きっと浮かれてハメを外したのね」

映し出された顔と名前にどこか、懐かしいような、悔しいような、いや、憎しみに似た感情が心の底にあっただが、それもすぐに消え去った。

リビングの端に、あの『冷凍庫』はずっと動き続けている。その隣に置いてあった袋の底に、一枚の注意書きが入っていた。その注意書きにはこうある。

『凍らせすぎますと対象者に大きな影響が出ます。場合によっては対象者の生命に関わる可能性が…』

「まいどあり。お譲さんの記憶の一部、確かに」

薄暗い部屋の中で、蒼く光る眼をした老人はそう呟いた。

体験版の、あとがき

サークル『飛ぶ黒猫』の渡瀬です。

今回も体験版をお手にとって頂き、ありがとうございます。

体験版でどんな傾向の作品集かは分かって頂けたと思いますが、これを機にどうか逃げないで本編も楽しんでもらえるとうれしいです。

作品を書いていて思うのですが、「これはウケる」とか「これは萌えるぜ!」といった作品・・・そっさいえば無いなあ〜と思う今日この頃。今度はそっちにも力を入れてみたいと密かに考えていますが、また同じ路線に行くような気がします。

本編ではもっととへビーな話も収録されていますのでお好きな方、初めてでも読んでみたい方は是非!

それではこのへんで失礼いたします。

渡瀬
由

ショートショート・ライブラリー第2弾

『ヒュプノスの眠り』

収録本数・10本

価格・210円税込み

8月中旬販売開始予定です。